



「新建築」1974年6月号より

## 基礎データ

着工：1970年  
 開業：1974年  
 延床面積：63,120.19㎡  
 高さ：99.70m  
 階数：地上25階、塔屋2階付、地下4階（駐車場部分地下5階）  
 構造形式：地上部鉄骨構造、地下1階、2階は鉄骨鉄筋コンクリート構造、その他鉄筋コンクリート構造

設計者 前川國男

1905年新潟生まれ、東京育ち。1928年東京帝国大学工学部建築学科卒業。卒業したその日に東京をたち、シベリア鉄道に乗ってフランスへ渡り、ル・コルビュジエの事務所へ入所。2年間修行した後、帰国しアントニン・レーモンドの事務所に入所。その後、独立して日本の戦後の建築界をリードする建築家として活躍する。神奈川県立音楽堂・図書館、東京文化会館、埼玉会館など戦後の名建築を数多く築く。1986年没。



©Yasukazu Miyazaki

## 見どころポイント① 彫りの深い顔立ち



窓が後退して外壁との間に75センチの空間があります。この空間による彫りの深い顔立ち（外観）が、東京海上日動ビルと他の高層ビルで大きく異なる点です。なぜ、床面積を減らしてまで窓を後退させたのでしょうか？それは清掃の時に危なくないようにです。また、オフィスのなかで働く人が日差しを受けにくいようにという配慮もあります。「人間のための建築」を目指した前川國男のこまやかな心遣いが感じられる意匠です。

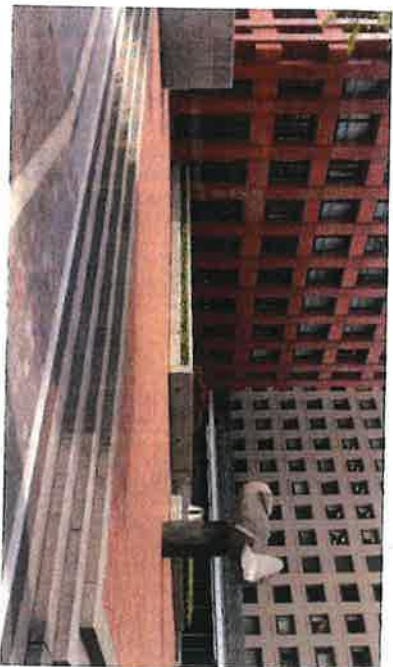
## 見どころポイント② 「焼き物」の外壁



外に出たら壁のレンガ調のタイルを触ってみて下さい。指先になじむ、優しく温かみのある手触りがしませんか？これは備前焼や信楽焼と同じ炝器（せつき）という陶磁器を素材にしたタイルです。前川國男は「焼き物」という日本人が慣れ親しんだ素材を好んで使いました。さらにこのタイルは「打ち込みタイル」というコンクリートを固める時に一緒にくっつけられているので、はがれにくく頑丈なつくりになっています。



### 見どころポイント③ 敷地面積半分以上の広場



この広場は敷地面積の60パーセントを占めています。他のビルが敷地いっぱい立っているのに対して、敷地の半分以上を広場として市民に解放しているのです。新宿の紀伊国屋ビルディング（1964）

を前川國男がつくった時「濁ききった砂をかむような町に、何か一息つける場所を創りたい」と「路地空間」を創出しましたが、ここでも都市の中で安らぎをもたらす場として、渾身の力をこめた広場がつくられています。

### 見どころポイント④ 「海」にちなんだ流政之の彫刻



広場にある2つの彫刻は、アメリカNYのフールド・トリードセンターの彫刻などを手掛けた彫刻家・流政之（1923-2018）氏のもので、1つは「波かぐら」、1つは「くぐりえびす」という作品です。この2つの作品名を聞いてピンときた人は鋭いでしょう。どちらも「海」に関連する名前です。東京海上なので「海」にちなんだ作品です。流と前川國男は上野の東京文化会館でも共作しています。また現在、前川建築設計事務所（MIDビル、1954）

の入口に置かれている前川の愛犬の像も流の作品です。

### 見どころポイント⑤ ポルトガル産御影石



入口で出迎えてくれるのはポルトガル産御影石です。流政之が作品でこの石を使っており、それに合わせて広場やエントランスホールの石もすべてポルトガ

ル産の御影石を使用しています。前川國男は建築の素材にこだわり、物の持つ本質、迫力を大切にしました。1階エントランスホールの御影石の壁の迫力は圧巻です。表面は叩いて凹凸をつける「はつり」の技法も見られます。

### 見どころポイント⑥ シーリングライト、タイル

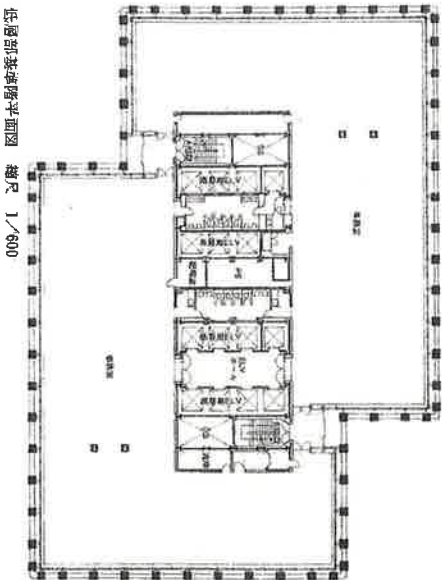


左はできたばかりの頃のエントランスホールの写真です。天井の照明に注目して下さい。照明が花のように配置され、何とも優美な姿をしています。この照明は当時「梅鉢」と呼ばれていました。現在ではほとんど残っておらず、エレベーターホールの辺りで少し見られるくらいです。床のタイルもぜひ注目したいポイントです。前川國男はタイルにも非常にこだわりました。床タイルも炆器質で、外壁

の打ち込みタイルと同じです。タイルの形もユニークで素敵です。

## 見どころポイント⑦ 矩形を2つ重ねた平面形

『新建築』1974年6月号より



低層部基準階平面図 縮尺 1/600

こちらら平面図です。超高層ビルの平面形は1つの矩形(長方形)であることが多いですが、東京海上日動ビルは2つの矩形(長方形)を少しずらして重ね合わせた形をしています。これによってセンターにコアを設けています。この考え方は、1958年のトロント市庁舎のコンペの時から前川國男が温めていた超高層ビルの平面形だといえます。

## 見どころポイント⑧ 緻密に計算されたオフィス設計

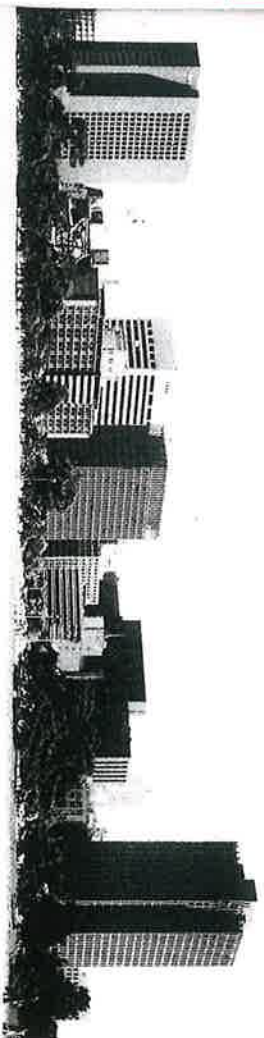
『日経アーキテクチュア』1986年3月24日号より



こちらは東京海上日動ビルの昔のオフィス階の様子です。この建物の基準寸法(モジュール)は1.5メートル。これは事務机の大きさと配列を考えて、最も最適な長さであると、採用されました。また、建設時は超高層ビルの

エレベーターの時間帯別混雑度のデータも無かったため、前川國男建築設計事務所が手分けして測定し、それをもとに建物は設計されました。

## 東京海上日動ビル本館年表



- 1965年3月 設計監理を前川國男建築設計事務所に委嘱
- 10月 東京都へ建築確認申請書を提出(地上30階127.768m)
- 1967年4月 東京都から「この建築計画は一団の土地ではないので容積率および斜線の規定に適合しない」旨の通知受領
- 6月 東京都建築審査会に「4月15日付けの東京都の処分を取り消す」旨の裁決を求める審査請求書を提出
- 9月 東京都建築審査会「都の処分を取り消す」旨の裁決
- 10月 東京都知事に対し「提出中の建設大臣あて認定申請書を建設省に申達し、かつ建築確認事務手続きを迅速にすすめるよう」陳情書を提出、東京都は認定申請書を建設省に申達
- 西村建設相が「構造認定の申請を受けたが、重要な問題なので慎重に検討する」との談話発表
- 11月 東京海上の水沢会長、山本社長が佐藤栄作首相に本館の建築計画を説明
- 佐藤首相「お濠端に建てることは控えて欲しい」との見解発表
- 1968年5月 建設相あてに「速やかに認定されたい」旨の要望書提出
- 1970年9月 建設計画を変更、地上25階、高さ99.700mにして建設相あての認定申請書を提出、建設相の認定書受領
- 10月 設計変更による建築確認書類を提出
- 12月 確認書類を受領、建築着工
- 1974年3月 竣工式